

明倫短期大学学会 月例研究会抄録

平成 29 年度明倫短期大学学会月例研究会は、平成 29 年 5 月 24 日の第 85 回から 1 月 25 日の第 91 回まで計 6 回開催された。歴年の演題名等は学会 HP をご参照下さい。

第85回：2017年5月24日（水） 座長：本間和代

論文の書き方・テーマ・統計処理

河野正司（明倫短期大学学長）

植木一範（歯科技工士学科）

平成 29 年度より、歯科技工士学科専攻科生体技工専攻が大学改革支援学位授与機構認定専攻科として新たなスタートを切った。歯科衛生士学科専攻科口腔保健衛生学専攻と併せ、両学科において、学修成果レポート（卒業論文）のために、計画的に研究を遂行し、データを分析し、論文形式に仕上げるべく取り組む必要がある。ここでは、専攻科学生とともに、若手教員にとっても重要と考えられる、論文の書き方、研究の進め方について、河野学長より改めてお話し頂いた。さらに植木講師より、データ分析、統計処理手法およびその目的について解説した。

第86回：2017年6月22日（木） 座長：野村章子

ノンメタルクラスプデンチャーのメンテナンス ～間接法による義歯修理について～

伊藤圭一（歯科技工士学科）

近年、金属製クラスプを使用しないことによる優れた審美性により、部分床義歯症例においてノンメタルクラスプデンチャーが使用される機会が増えている。ノンメタルクラスプデンチャーは、床用レジジンとしてポリアミド系、ポリエステル系、ポリカーボネート系、アクリル系の熱可塑性レジジンが用いられている。曲げ強さ・曲げ弾性率は各材料で異なるが、しなやかで回復力に富む特長は金属製クラスプを用いずとも義歯の離脱力に抵抗できつつ、コンパクトで装着感に優れる設計を可能にした。

その一方で、ノンメタルクラスプデンチャーは修理が難しいことが指摘されている。ポリエステル系レジジンのように常温重合レジジンとの接着に優れる材料もあるが、これまでノンメタルクラスプデンチャーの代表的な材料であったポリアミド系レジ

ンは常温重合レジジンとは接着しない樹脂であるため、直接法による修理は不可であることや、ポリカーボネート系レジジンに関しても直接法による修理は、接着面で剥離が起きることがあるため不向きである。ただし、レイニング樹脂 N[®] の間接法によるリペアについては、再射出による熱溶着が行えるため、増歯、破折ならびにリラインに関するリペアを容易に行うことが出来る。今回は、レイニング樹脂 N[®] を用いたノンメタルクラスプデンチャーの間接法によるリペア方法について報告した。

アイルランドの歴史と言語

廣瀬浩二（歯科衛生士学科）

アイルランド政府奨学金（2015 Ireland Scholarship Programme）を得て行ったダブリン市立大学（Dublin City University, DCU）での研究報告である。宿泊先は、Ms Sharon Keely 宅であった。DCU の教員、Ms Sharon Keely、町で出会ったダブリン市民と対話する中で、アイルランドの歴史と言語の関係に興味を抱き、アイルランドにおける言語使用の変遷を紀元前 8000 年からアイルランド語の形成期といわれる 1500 年までを遡って概観した。中石器時代の紀元前 8000 年から 7000 年の間に、最初の人間がアイルランドに足を踏み入れた。紀元前 1200 年頃、ケルト人がイベリア半島から来て、アイルランド南部と西部に定着した。彼らの話す言語は Q-Celtic と呼ばれている。その後、数世紀に亘って、ケルト人は初期アイルランド居住者と融合し、ゆっくりと彼らの言語と文化を吸収していった。この言語の進化が、アイルランドの島全体に普及するゲール語（Irish Gaelic）となった。その後、バイキングやアングロノルマン人の使用した言語の影響を受け、初期現代アイルランド語へと発展した。

第87回：2017年7月27日（木） 座長：木暮ミカ

シミュレーション画像を使用した 歯の色の似合い評価

小野真奈美（歯科衛生士学科）

本学歯科衛生士学科学生のうち、自分の歯の色に不満があり、ホワイトニングを希望する 12 名に対し、視感比色法によるシェードテイキングと顔写真撮影